

氏名	澁澤 星
ヨミガナ	シブサワ セイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第495号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 越境の時空—暗示と想起の形— 〈作品〉 ・「実り」 ・「UNION」

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	関 出
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤 典彦

（論文内容の要旨）

私にとって絵画は、現実でありながら幻想であることが許される媒体としてあり、そのことへの関心から制作活動をおこなってきた。そして私は絵画に、現実と幻想、客観性と主観、時間や実感、感動など客観的に提示する事の難しい様々な事柄を複合させることで、一つの世界として形象化することができると考えており、そのような多様性を魅力と捉え表現しようと試みてきた。

物事に限界のある現実の世界に対して、制約のない開かれた理想の世界、つまり自由な精神世界を表現しようとしてきた。私にとっての理想の空間とは、桃源郷のような人智を越えた遠い存在ではない。それは日々を過ごす中で実感として刻まれた感動を凝縮し形象化した、現実と近似していながらも特別性を持つ空間である。思想と白昼夢の狭間のような、現実と幻想の共存であり、その境目を探しながら描いている。

本論文では、現実と非現実が実際にはボーダーレスであることを確認した上で、万人に共通する客観性（＝リアル）より主観的リアリティを、絵画という媒体を通して表現し、周囲とそれを共有することの意味を考察した。加えて、祭事や宗教美術などにも、リアルとリアリティの表現の仕方に絵画との類似性があることを比較、検証した。

実際に筆者が画面上で表現する際には、人物や動植物、静物等のモチーフによる写実表現と、マチエールによる抽象表現を混在させながら制作している。殆どの場合、人物はメインの位置に配置される。しかしその人物像を描くことが目的ではなく、あくまでも空間の語り部として、表現したい世界を示唆する役割である。その上で、虚構だが当人にとっては真実であるリアリティと、現実との微妙な境目が、どのように表現可能なのかを考察した。

本論文は三章で構成される。

第一章「越境するイメージ」では、客観性（リアル）より、主観的リアリティを、絵画という媒体を通して表現し、周囲と共有することの意味を考察した。第一節では、原風景であり発想の起点となっている幼少期に接した長崎県の山村の土地と気質、市街地の歴史的背景、様々な国の多様な文化と日本文化の混在と、共存、それらが自身の絵画に与えた影響について述べた。第二節では、時間認識について、進化生物学のサンプルが内包する現実の時間と、ヴァーチャルリアリティによる時間感覚のズレについて比較し、絵画における時間表現の可能性を論じた。そして第三節では、中東・アフリカ・ヨーロッパなど、言葉の通じない異文化の地を訪れた経験から、コミュニケーションや記録としての絵画の可能性について論述した。

第二章「リアルとリアリティ」では、現実と幻想の境界を曖昧にし、精神の旅のような印象を引き起こす事

例として、トルコの宗教美術を挙げた。それは、信仰という切実な真実の一方、全ての人間に共通する客観的な正解があるわけではない点が、リアルとリアリティが共存する絵画と酷似している。特にトルコの宗教美術には、ヒッタイト、ビザンティン、オスマンなどの様々な文化が、混在し共存する。それらが、一つの宗教を超えた意味を生み出してきた様子を、同様に様々な要素を受け入れて変容してきた日本文化と比較した。

第三章「越境と認識のプロセス」では、イメージの越境を絵画で表現する際、具体的に何をどのように描くのか、発想から表現へのプロセスを、自らの作品で考察した。第一節「モチーフとマチエール（現象と構造）」では、マチエールや図像を複雑に混在させる事で、描く対象を抽象化しなくても現実と非現実の境を臚げにし、想像を喚起しうることを検証した。事例として、オディロン・ルドン、エゴン・シーレ、室生寺の板光背などを挙げた。第二節「暗示と想起の形」では、暗示によって鑑賞者にイメージを想起させる表現方法について考察した。具象表現を想像のきっかけとしながら、暗示に留め、あえて反芻と展開の余地を残すことで、次の想像へのきっかけとする方法論である。第三節「人の形」では、筆者が絵の主演として配置する人の形について考察した。近代にもたらされた対象を立体的に再現する西洋の彫刻的人体と、それ以前の仕草や表情などによる日本の人物描写を比較しながら、現代に生きる自分自身の表現に言及した。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、人物モチーフを中心に、暗示的表現で現実と幻想、客観と主観を交錯させ、観者の実感とリアリティを想起させようとする筆者の創作論について論述したものである。

筆者はすでに世界各地を旅行し、様々な歴史や文化、生活習慣に触れている。作品には若い日本人女性と外国人女性が多く登場し、前者は夢と現実の間にまどろみ、後者は強い視線で正面を向くポーズの作品が多い。その服装や周囲に様々なオーナメントを暗示的に記し、背景は多くを描かない。筆者がめざしているのは、特定の理想的世界ではなく、日常の断片的な風景に様々な歴史や文化が垣間見える、現実と白昼夢（幻想）の狭間のような世界であり、その“越境”は、国籍や文化、歴史や時間を問わない。異文化との出会いのインパクトというより、それに自然に触れて育った多様性が、筆者のモチベーションの基底にある様子が窺われる。

第1章では、筆者の原風景となっている多様な文化が混在、共存する長崎の風景について。また動物標本や、クリスマスリース、沖縄の注連縄など、時間がいまに凝縮した進化の痕跡や祭具。アフリカのマサイ族の村で写生した際、彼らが写真は知っていても、写生という行為、そこに描かれた画像による自己認識という習慣を持っていなかった興味深いエピソードなどが記されている。第2章では、トルコの Cappadocia やアヤソフィアなど、キリスト教、イスラム教の強い信仰のリアリティと幻想性が交錯した世界。アイヌの現世と異界をつなぐイヨマンテの儀式。現代アートで日常を異化するウィリアム・エグルストンらの作品などに言及する。そして第3章で、「暗示と想起の形」を生むための自身の表現上の工夫として、シンプルな図様とモザイク状のオーナメントの混在、それを実践した提出作品2点について解説している。

筆者がさがし求めているのは、ことさらにモニュメンタルな世界ではなく、日常的な人物風景に様々な要因が暗示的に凝縮された「特別性をもつ空間」である。作品自体のシンプルで説得力のある画面に対して、論文で言及される事例の多さから、当初、「越境」によって何を表現しようとしているのか、やや分かりづらい感があった。ただ提出作品の一点もそうであるように、筆者の作品には「union」（結合、合体）と題された作品が少なくない。その意味では、数多い言及事例は、筆者が成長過程で自然に身につけてきた文化の多様性を示し、作品ではその自身の歴史を、越境というよりむしろ結合、統合する形で表現しようとしているのかもしれない。論文の論旨や文脈は、今後さらに展開していくことが予想されるが、これまでの筆者の多彩な体験と紹介事例から、現時点での筆者の意識とイメージを十分に示した学位論文として、審査会での承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

提出作品「実り」「UNION」は、申請者の画想となる「現実(固有の形態)と非現実(空想)の融合」による自己表現を追究してきた成果作品といえよう。持ち前の感性には鋭さがあり、形象を簡潔に捉える素描力や色彩感覚にも優れ、これまでもその特性を発揮してきた。

申請者自身が幼少期に得た原体験を想起させる豊富なイメージとともに、その後多様な風土や宗教、文化から直接に得た実感は、絵画制作の発想と表現における根拠として生かされてきた。画面上の主な位置には若い女性を配し、その仕草や表情にも、周囲の装飾や簡略化にも、自身の表現上の工夫が見られた。これは論文主題に含まれる「暗示と想起の形」を強く目指しての考慮によるもので、単に装飾的考案とはいえない。画面に描く対象について具体詳細な説明描写に徹することも、その有様の抽象化を進めることもせず、現実と非現実の境をおぼろげなる状況とすることが制作の定法であった。

提出作品「実り」は紙本彩色の大作(3500×1600mm)で、画面は中央のパネルを主体として、両翼に幅の狭いパネルが加わって全体が構成された。中心に二人の若い女性を配しているが、相互に作用し合う感情表現は見られず、また、着衣の様子も対照的であった。簡素な装いで素足の女性は存在自体の魅力を意識し、華やかな飾りを身に着けた女性の方は、面貌や装う姿と共にその人物の思想を暗示することを願ったようであり、果実は豊かさや美の象徴として添えたという。周囲は明るい薄茶系の彩色で多くを説明しない。画面上、顔料の層の重なりは比較的に薄手ではあるが、魅力に富む絵肌となっていた。この作品は、豊かさの意味を自身に問い、形象化する研究制作であったと申請者は語る。

提出作品「UNION」は紙本彩色の作品(2100×1600mm)で、パネル3枚を仕立て、一つの画面とした。申請者は以前よりエゴン・シーレやオディロン・ルドンに関心を寄せてきた。装飾性と共にシンプルな作品構成による画面からは多くの示唆を受けた様子が窺える。3分割された画面からは、あたかも三面鏡の前に佇む一人のムスリム(イスラム教徒)の若い女性を描いたかの様子であるが、鏡ではなく、モザイクに囲まれたイスラム世界に住む二人の女性を描いた作品であった。様々な模様のスカーフを纏った正面を向く女性と、髪を三つ編みにした女性の後ろ姿を背中合わせに構成し、両様とも見える入り混じったイメージを中軸に、時代性を反映した越境か、あるいは融合への幻想かを、自由に空想させようと示したかのようであった。この作品の背景も明るく穏やかな空間であり、静かな平面性も併せ持っていた。

審査会において、提出作品が学位にふさわしい優れた内容であると全員が高く評価し、合格とした。

(総合審査結果の要旨)

絵画における理想の空間は「現実でありながら、幻想が共存できる自由な精神的世界であり、その境目を探しながら描いている」と考える筆者が、その世界を越境の時空ととらえ、その空間と自身の表現との関係を論述して作品にしている。

作品の殆どを人物がメインに位置し、その周りを動物・静物が写実的かつ平面的に配置されている。その表現方法は極めて端的で、優れた素描力と構成で少ない作業で大胆かつ静的に表現されている。その表現の中に気韻生動が感じられる。

申請者は東京芸術大学絵画科日本画に入学以降、学部、大学院を通じ人物を中心に異国の調度品・花・動物などを配置し構成した作品を多く描いていた。卒業制作(2010年)「萱草に寄す」・修士制作(2012年)「旅」は共に異国の香りのする完成度の高い作品を制作している。博士課程入学後1年休学し、海外にも積極的に取材に出ている。

博士課程の提出作品「実り」「UNION」は共に今までのような多くのモチーフの構成的な作品から脱却し広い色面(空間)を取り入れた画面は素材の知識・方法の習得に幅広い勉学、研究が必要になるが、意欲的な行動力と精神的な探求心で完成度の高く、作品のすべてに流れる詩情と気韻する生動により心に響く作品となった。

論文においては「越境の時空－暗示と想起の形」と題し〈1章 越境するイメージ〉〈2章 リアルとリアリティ〉〈3章 越境と認識のプロセス〉と説いたうえで現実と幻想であることが許される媒体としての理想の空間、理想と白昼夢の狭間、その境目を描いているとしている。

2015年11月30日、12月15日、主査、副査である日本画研究室教員の4名(梅原・関・手塚・斎藤)及び論文担当第1副査、佐藤道信教授と共に審査会を行い、博士学位授与に値すると判断した。

審査会において審査対象の作品は独自の視点と感性をもった神経の行き届いた作品で完成度も高く、高い水準に達していると評価され、全員が合格と判定した。